

科学

スナメリ死骸 何を語る？

スナメリ ネズミイルカ科に属する小型のイルカ。大人は大きさ1.4~2m程度で頭が丸く、くちばしや背びれがない。一般に水深50mより浅い砂底の海に生息する。日本では五つの海域に分布し、ナメクジラ、ボウズウオなどの地方名がある。

実習が行われる部屋の台には、死んで静岡県にストランディングした雌のスナメリ1頭が載せられていた。

■死因を調査



クジラやイルカなど海の哺乳類が海岸に生きたまま打ち上げられたり、死んで漂着したりする現象は「ストランディング」と呼ばれている。国立科学博物館筑波研究施設（茨城県つくば市）で今夏、ストランディングした海洋生物の死因を調べた学生向けの実習の様子を、藤沢一紀記者(36)が取材したよ。



た。冒頭、全員に「ストランディングは、海の生物が命と引き換えに送るメッセージです」と語りかけた。「犬や猫と同じ哺乳類で共通点も多い。よく観察して死因を調べましょう」田島さんはまず、体表の傷を確認させた。船のスクリューに巻き込まれたり、

「推理小説の謎解きに似ています」と田島さん。いくら調べても死因が不明なことは多い。「高齢による老衰とみられる」という結論が出るまで、3時間半の実習は瞬く間に過ぎた。

「エサを捕獲できる。衰弱していなかったのか」出産に失敗して、弱ったのでは。全員で、様々な意見を交わし合った。

ストランディングの原因は病気やけが、シャチに追われるなど様々だ。内部に深刻な病変はなく、胃はエサで満たされていた。

「エサを捕獲できる。衰弱していなかったのか」出産に失敗して、弱ったのでは。全員で、様々な意見を交わし合った。

ストランディングしたスナメリを使った実習。田島さん(左下)の指導を、学生が真剣に聞き入る



テリさんのひと言 なかなか大変な仕事じゃが、田島さんの研究は一つの動物の命から海まで、様々なことを守ろうとしているのじゃ。命の尊さや自然の大切さが、若者たちに伝わったと思うぞ。

次回「オフィス ケン研究所」は11月16日掲載の予定です。

死因を徹底して究明することは、次のストランディングを防ぐことにつながる。田島さんは「1頭の死から得た情報で種全体を守るかもしれない」と話す。

イルカやクジラは食物連鎖で上位に位置し、環境汚染物質を取り込みやすい。「寄生虫は、寄生した生物を殺さないようにするが、環境汚染物質がたまる」と免疫の働きが落ちて重い病気を起こし、ストランディングするのではないかと

田島さんは瀬戸内海や長崎・大村湾でストランディングしたスナメリの調査を2011年に発表し、寄生虫と環境汚染物質の意外な関係を明らかにした。ダイオキシン類が肝臓にたまるほど肝臓の寄生虫が増え、皮下脂肪に有機スズがたまるほど肺の寄生虫が増えることなどがわかった。

■環境汚染究明